

白田山重忠

武蔵武士の鑑

かがみ



はたけやま
しげただ

一 畠山重忠が生まれた時代

はたけやましげただ

時代背景

畠山重忠が生きた時代は、平安時代の終わりから鎌倉時代初め頃で、今から八百年以上前になります。この頃の武蔵国には、よい馬や牛を育てる牧場があり、鉄の武器などをつくる技術者も多く住んでいました。強い馬とよい鉄の武器が重忠をはじめとする武士の活躍を支えていました。また、武蔵国では、武士たちの様々な集団が、結婚やその他の親せき関係などによりつくられていました。中でも「武蔵七党」と呼ばれる七つの武士団は、よく知られています。

畠山氏は、「武蔵七党」とは異なり、秩父地方に勢力のあつた秩父氏の一族です。秩父氏は、平氏の一族であり、「坂東八平氏」と呼ばれる武士団のひとつで、とても強い勢力をもっていました。

この頃、京の都では、平治元年（一一五九）に、平治の乱が起こりました。この戦いでは、平氏が源氏に勝利し、平氏が大きな勢力をもつきっかけとなりました。秩父氏をはじめとする武蔵武士の多くも平氏に従いました。



武蔵国を中心とした武士の分布

—— 畠山重忠の誕生 ——

畠山重忠は、長寛二年

(一一六四)、武蔵国畠

山（現在の深谷市畠山）

の館に、畠山重能を父、

相模国の有力武士、三浦

義明の娘を母として誕生

しました。川本地区にあ

る畠山重忠公史跡公園に

は、重忠が産湯として

使ったという伝説の井戸

が、今でも残っています。

「畠山」を名乗ったの

は、重忠の父、重能が秩

父から畠山の地に移り住み、館を構えたことがはじまりです。重

忠の幼いころの名は、氏王丸といいました。

重能は、かつては源氏に仕えていましたが、平治の乱以後は平

清盛の息子たちに仕えていました。重忠は、平氏の力が最も強い

時代に生まれたのでした。



伝重忠産湯の井戸



畠山重忠館跡

二 源平合戦と畠山重忠

げんべいがっせん

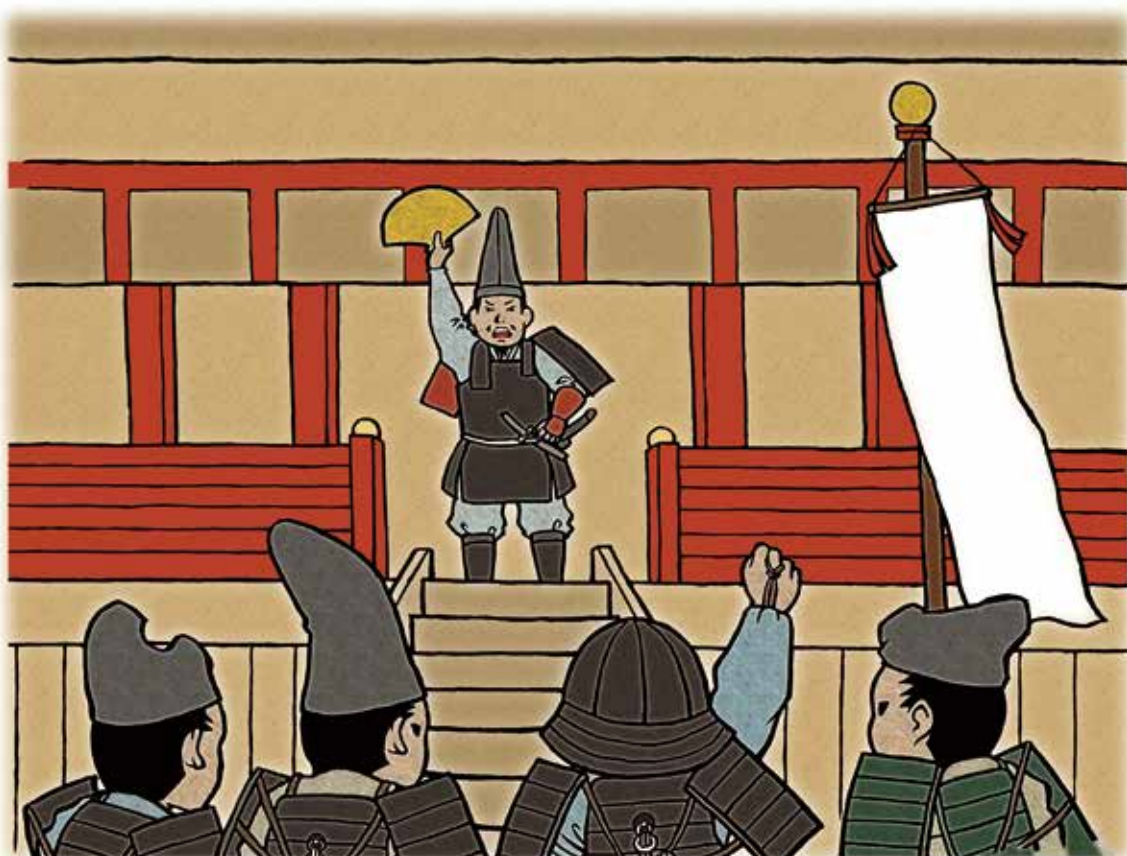
— 頼朝の旗あげ —

治承四年（一一八〇）五月に、後白河法皇の皇子、以仁王が、平氏打倒の兵をあげるとともに、全国の武士にも兵をあげるよう呼びかけました。これをきっかけとして、源頼朝が平氏打倒を目指して伊豆国で兵をあげます。

その頃、重忠の父、重能は、京の都の警備の仕事を命じられていました。地元に残っていた重忠は、父と同じく平氏の味方として源氏方についた三浦氏の城を攻撃し落城させました。その時、重忠は十七歳の若者でした。

— 頼朝に従う —

この戦いの後、頼朝の呼びかけにより、各地から二万七千騎もの軍勢が集まりました。頼朝は、その軍勢を武蔵国へ進めました。重忠は、平氏と源氏のどちらに味方をするべきか悩み、最も信頼する部下の一人である榛沢成清に相談しました。重忠は、幼い頃、成清の母親の乳を飲んで育っており、とても親しい関係でした。



頼朝旗あげ

成清は、「平氏との関係は、一時のものです。源氏の恩は、先祖代々のものです。ぐずぐずしているうちに源氏の軍が攻めてくるでしょう。すぐ頼朝公に味方するため、かけつけるべきです。」と源氏方につくようすすめました。



成清と相談

重忠は、成清の助言を聞き、先祖が源氏にしたがった時にさした白旗を立て、頼朝のもとへ五百騎の軍勢を率いて向かいました。

墨田川の石浜で、重忠と対面した頼朝は、次々に厳しい質問をしましたが、重忠は、どの質問にも堂々と答え、自分たちは、源氏に代々お仕えする一族であることを伝えました。

重忠のことをとても気に入った頼朝は、源氏方につくことを許しました。また、重忠の武将としての力を高く評価し、その後の頼朝軍の先陣を多く任せました。



石浜



鎌倉入りの先陣

木曾義仲の滅亡と宇治川の戦い

重忠が源頼朝に従った治承四年（一一八〇）以降、戦いはますます拡大していき、平氏を討つために日本各地の源氏の勢力が立ち上がりました。木曾義仲は、頼朝とは、いとこの関係にあたります。重忠の父、重能は、義仲が幼い頃、命を助けたことがあり、畠山一族とも縁のある武将です。

寿永二年（一一八三）に京の都から、平氏を追い出した義仲軍でしたが、乱暴なことばかりしていたので、人々からうらまれていました。そして後白河法皇とも対立するようになり、法皇は源頼朝に対し、義仲を討ちとるよう命令しました。これを受けた頼朝は、弟の範頼・義経に大軍をあたえて京都に向かわせました。京都の宇治川周辺で行われた両軍の合戦を宇治川の戦いといいます。重忠は、宇治川を渡っている時に馬を矢で射られてしまい、途中から徒歩で川を渡りました。敵のいる対岸へ上がろうとしたところ、馬を流されてしまった大串重親が、しがみついていたので、たいへん力持ちだった重忠は、重親を岸に投げあげました。

そのため、重親は、「武蔵国の住人大串重親、徒歩では私が先陣だ」と名乗りを上げ、敵も味方もどっと笑ったといわれています。



宇治川の戦い

範頼軍と義経軍に攻められた木曾義仲は、京都から逃げる途中で、討ち取られてしまいました。

— ひよどり越の逆落とし —

京都を追い出された平氏は、次第に勢いを盛り返し、義仲が亡くなる前後には、播磨国（兵庫県）まで戻ってきます。元暦元年（一一八四）二月、範頼・義経ら源氏の軍勢は、一の谷（兵庫県神戸市周辺）に陣をかまえた平氏へ攻撃を開始します。

この一の谷の戦いでは、義経軍は、ひよどり越と呼ばれた断崖絶壁を馬で駆け下り、平氏軍の後ろから襲いかかったといわれています。この時、重忠は愛馬「三日月」が、けがをしてはかわいそうだと思います、背負って崖をおりたという話が残されています。

予想もしないところから攻撃を受けた平氏軍は、たちまち混乱におちいり、舟で海へと逃げていったとされています。



逆落としに馬を背負う

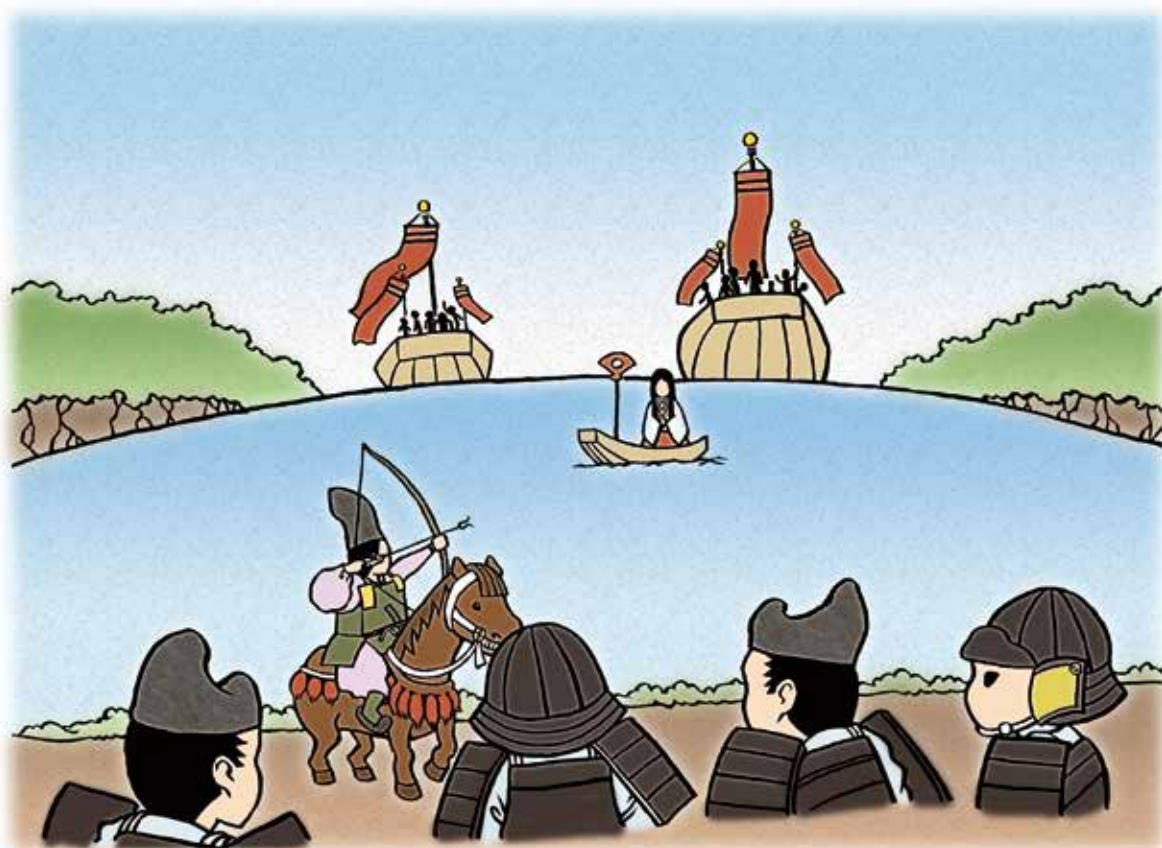
— 平氏の滅亡 —

一の谷の戦いの後、平氏は瀬戸内海を渡って讃岐国（香川県）の屋島（高松市）へ逃げました。頼朝は、まず範頼を、後から義経を向かわせませす。重忠も範頼に従って西に向かいました。

屋島の戦いでは、義経軍の奇襲作戦に驚いた平氏軍は、陸の陣地を捨てて海上に逃げてしまいます。夕方になると、海上の平氏の軍から美女を乗せ、扇をかざした小船があらわれました。

この扇を那須与一が見事に弓で、うち落としました。最初、義経は重忠に「あの扇をうち落とせ」と命令しますが、体調をくずしていた重忠がことわったため、那須与一がかわりに弓をうったということなのです。

その後の激戦の末、平氏はさらに西へと逃げていき、約一ヶ月後、壇ノ浦（山口県下関市）で、源平最後の合戦が行われました。この壇ノ浦の戦いでも平氏は敗れ、多くの武将たちが海に身を投げました。二十年以上の間、富み栄え、これ以上ないところまでのぼりつめた平氏でしたが、ここに滅亡しました。



屋島の戦い

三 鎌倉武士の鑑、畠山重忠

— 源義経と静の舞 —

平氏との戦いで、手がらのあつた義経でしたが、頼朝の許ゆるしのないまま朝廷ちやうていの役職やくしょくについてしまったことなどから、頼朝との仲は、次第に悪くなつてしまいました。文治元年（一一八五）頼朝は、ついに義経を討つよう命令を出し、義経は追われる身となりました。逃げる義経のそばには、白拍子※16という舞の名人めいじんであつた静御前しずかごぜんが妻つまのように寄りそつていました。静は、雪降る吉野山よしのやま（奈良県吉野町）まで一緒に逃げましたが、この先は足手あしでまといとなつてしまふと考え、悲しみながら義経と別れたのでした。その後、とらえられた静は、鎌倉で取り調べを受けましたが、義経と別れた後の足取りを知るはずもなく、やがて解放かいほうされました。※17

頼朝の妻の北条政子は、有名な静の舞を、ぜひ見たいと頼朝にねだりました。

「吉野山 峰みねの白雪しらゆき 踏みわけて 入りにし人の あとこいぞ恋しき」



静の舞と銅拍子を打つ重忠

静は、義経と離れ離れになった悲しみをこめ、歌に合わせて舞いました。静が舞うとき、銅拍子を重忠が打って伴奏をつとめました。¹⁸

重忠は、武勇のみでなく、音楽の才能も広く認められていたの
でしょう。

— 重忠の一大事 —

文治三年（一一八七）六月、重忠にとって重大な事件が起きます。重忠が地頭をつとめていた伊勢国（三重県）の莊園で、¹⁹役人が不正を働いていたのです。重忠は、支配していた土地四ヶ所を没収され、とらわれの身となってしまいます。

とらわれた重忠は、じつと黙ったまま、一週間以上も食事をせず、眠りもしませんでした。重忠が死ぬつもりではないかと心配した仲間の報告を聞いた頼朝により、重忠は許されました。許された重忠は、この時任んでいた菅谷館（嵐山町）に戻りました。²⁰

ところが、菅谷館に帰ってしまった重忠をみて、梶原景時は、²¹頼朝に「重忠は、菅谷館で頼朝様にさからう準備をしているよう



とらわれの身の重忠

です。」と告げ口をしました。頼朝は、重忠の親友である武士を菅谷館に向かわせ、重忠を鎌倉に連れてくるよう命じました。

鎌倉の様子を聞いた重忠は、非常に怒り、「そんなふうに使われたのは、まったくもって恥ずかしいことだ。私が潔白であるのを見てくれ。」と言つて、自害して無実を証明しようとしたが、説得され、鎌倉に行くことになりました。

鎌倉で景時は、「反逆の計画がないことを誓い、そのことを文書にして提出しなさい。」と言いました。重忠は、「私がうそを言わないことは、頼朝公がよくご存じです。」と文書の提出を断りました。頼朝は、重忠に会いましたが、雑談をしただけで帰しました。

人望が厚く、頼朝からも信頼されていた重忠だけに、周囲からのねたみをかい、根拠のない疑いをかけられることもあったようです。



頼朝と雑談

— 東北地方へ —

奥州おうしゅう（現在の東北地方）まで逃れた義経は、藤原秀衡※22によって守られていましたが、文治三年（一一八七）に秀衡が亡くなると、後を継いだ泰衡※23は、頼朝の追及ついききゅうに逆らさかいきれず、義経を攻めて自害じがいさせてしまいました。

頼朝は、これまで義経をかくまっていたことを責めて、文治五年（一一八九）年七月、奥州の藤原氏を攻撃する命令を出しました。

重忠は、頼朝のいる一番大きな軍の先陣を任されました。軍勢が、阿津賀志山あつかしやま（福島県伊達郡国見町）まで、来たときのことです。泰衡の軍勢は、ここに城壁や水を引き込んだ堀をつくつたりして、堅く守っていました。重忠は、家来に鋤や鍬を持たせていたので、夜のうちにその堀を埋めて合戦を有利にしました。

人々は、あらかじめ鋤や鍬を用意していた重忠の考えの深さをたたえました。頼朝の大軍が迫る中、泰衡は家来の裏切りにあい、奥州の藤原氏は滅び、戦いは終わりを告げました。



阿津賀志山の戦い

鎌倉幕府に迫る不安

建久三年（一一九二）、頼朝は、征夷大將軍に任命され、鎌倉幕府を開きました。わずか七年後の正治元年（一一九九）に五十三歳で亡くなりました。そこで、頼朝と妻の北条政子の間に生まれた頼家が十八歳の若さで次の將軍になりました。

頼家は、身勝手な政治を行ったため、武士たちに力不足であると判断されてしまいました。そして、幕府のことは、將軍の頼家ではなく、北条氏などの有力御家人たちを中心に決めていくことになったのです。この結果、將軍の力は弱くなり、御家人たちの中で、権力をめぐる争いが起こりました。その中で、頼家は殺され、頼家と親せき関係にある比企氏一族も、滅ぼされてしまいました。

重忠のさびしい

比企氏の滅亡後、鎌倉の権力を手にしたのは、北条氏でした。頼家の弟の実朝がわずか十二歳で將軍となったので、北条政子の父・時政が幼い実朝の代わりに執権として実際の政治を行いました。

元久元年（一二〇四）八月、重忠の子、畠山重保は、時政の妻の親せきとけんかになってしまいます。怒った時政の妻は、時政

へ「畠山氏は、鎌倉幕府に反乱をおこすつもりです。」とうそを伝えました。

時政は、息子の北条義時たちに畠山氏を倒すべきか相談しました。義時は、これまで、忠節をつくしてきた重忠が反乱をおこすはずがないと討伐に反対します。しかし、最後まで反対しきれず、重忠の討伐が決定されました。

鎌倉で、事件が起こったという知らせを受け、元久二年（一二〇五）六月二十日、重保が鎌倉へ呼び出されました。これは、重忠、重保をだまし討ちするためのうそだったのです。重忠も十九日に菅谷館を出発し、二十二日の昼頃には二俣川（横浜市旭区）まで、来ていましたが、ここで息子の重保が討たれたことなどすべての策略を知ったのでした。

重忠の軍勢は、百三十騎あまりでしたが、対する北条の軍勢は数万を数えました。重忠に従う本田近常や榛沢成清は、一度菅谷館へ戻って準備をしてから戦うべきであると主張しました。

しかし、重忠は、「ここで引き返しては、反乱を起こす考えがあったかのように後々言われるかもしれない。武士として潔くここで戦うのだ」と言って戦うことを決めたのです。重忠たちが勇敢に立ち向かったので、戦いはなかなか決着が付きませんでした。しかし、敵の放った矢に当たり重忠は討たれ、残る配下も自害して

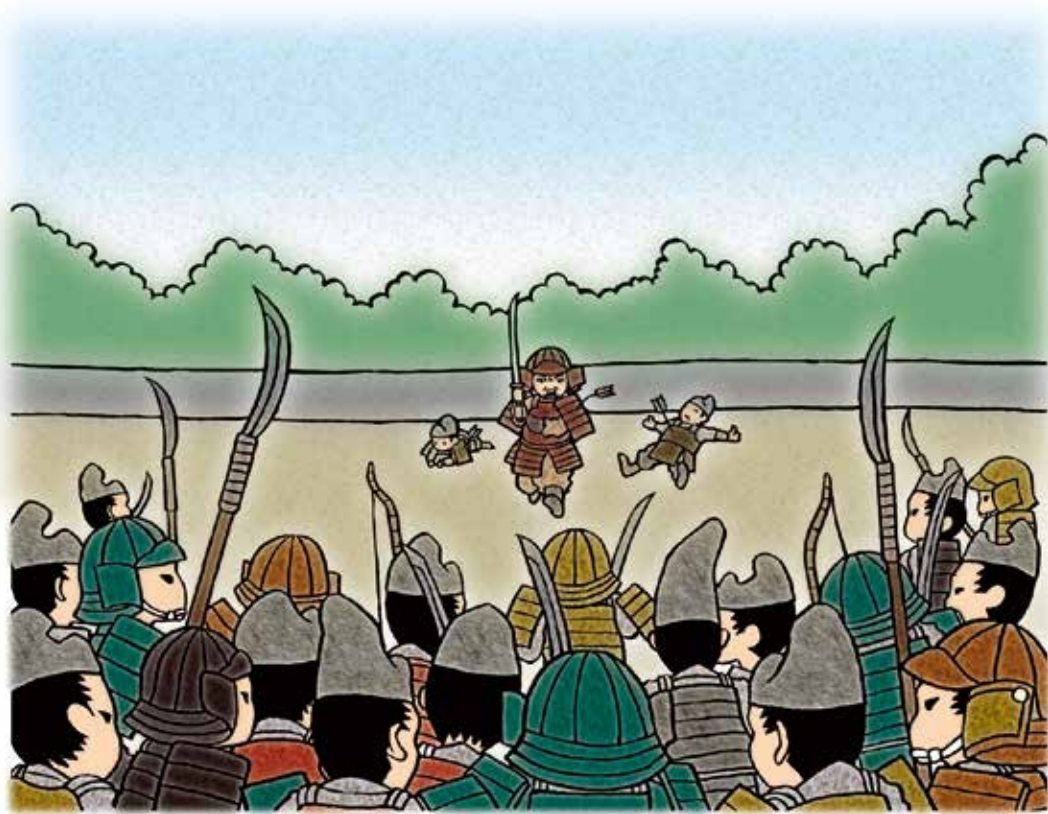
果てたのでした。

戦いから鎌倉に戻った義時は「重忠は、わずかな軍勢しか率いておらず、反乱を起こしたはずがない。かわいそうなことをしてしまった。」と時政に報告ほうこくしました。それを聞いた時政は、何も言うことができませんでした。

武蔵武士の鑑と言われた畠山重忠は、こうして四十二年の生涯しょうがいを閉じたのでした。



畠山重忠墓



二俣川の戦い

語句説明

- 1 武蔵国 むさしのくに 現在の埼玉県、東京都、神奈川県の一部。
- 2 武蔵七党 むさししちとう 武蔵七党には、猪俣党、丹党、野与党、児玉党、西党、横山党、村山党などがいます。深谷市周辺には、猪俣党の岡部六弥太忠澄、丹党の榛沢六郎成清がいます。
- 3 坂東八平氏 ばんとうはちへいし 平安時代中ごろに関東地方に勢力を伸ばした武士のことで、桓武天皇の血をひくとされます。上総、千葉、三浦、土肥、秩父、大庭、梶原、長尾などがいます。
- 4 相模国 さがみのくに 現在の神奈川県の一部。
- 5 重忠の母 むねただのぼろ 三浦義明の娘とする説と、江戸重継の娘とする説があります。
- 6 法皇 ほうおう 今の天皇の前の天皇のことを上皇といいますが、その上皇が僧となつて法皇と呼ばれます。
- 7 源頼朝 みなもとのもよとち 鎌倉幕府の初代将軍です。平氏を滅ぼし、鎌倉を本拠地にして、武士による政治をはじめました。息子には、二代将軍の頼家、三代将軍の実朝がいます。
- 8 伊豆国 いずのくに 現在の静岡県東部にある伊豆半島と、現在の東京都に含まれる伊豆諸島。
- 9 榛沢成清 はんざわなりきよ 現在の埼玉県深谷市の岡部地区に住んでいた武士です。畠山重忠の最も信頼する家来のひとりとして、数々の合戦を重忠とともに戦いました。現在の深谷市後榛沢には、成清の供養塔がのこされています。

- 10 石浜 いしはま 現在の東京都台東区にあったとされる地名です。重忠が頼朝に従った場所について、鎌倉幕府がつくった歴史書『吾妻鏡』には「長井の渡し」と書かれています。現在のどの場所であったかはよく分かっていません。
- 11 先陣 せんじん 大将がいる軍隊（本陣）のまわりよりも前におかれた軍隊のこと。最前線に立つ部隊で、先陣をまかされることはとても名誉なことでした。
- 12 木曾義仲 きそよしなか 源義朝のいとこで、義仲の父は頼朝の父に滅ぼされました。義仲は、重忠の父畠山重能や齋藤実盛（現在の熊谷市に住んでいた武士）に助けられたと言われ、信濃国（現在の長野県）の木曾で育ちました。
- 13 源範頼 みなもとのりより 源頼朝の弟です。兄である源頼朝に従い、畠山重忠をはじめとする各地の武士たちを率いて数々の合戦を戦いました。
- 14 源義経 みなもとのよしつね 源頼朝と源範頼の弟で、平氏との戦いで大活躍しました。しかし、頼朝と仲が悪くなってしまい、東北の地で滅ぼされてしまいました。悲劇の英雄として、さまざまな伝説がのこされている人物です。
- 15 大串重親 おおくししげちか 現在の埼玉県内に住んでいた武士です。重親は重忠を烏帽子親（成人する時に烏帽子をかぶせてあげる役）として元服（成人）し、重忠の「重」の一字をもらいました。現在、比企郡吉見町には「伝大串次郎重親塔」が残されています。
- 16 白拍子 しらびょうし 鎌倉時代に流行した、今様（当時の流行歌）などをうたいながらおどる舞のこと、または舞う女性のこと。

17 北条政子

北条時政の娘で、源頼朝の妻です。頼朝の死後には、鎌倉幕府を守るために力をつくし、幕府を指揮したので、「尼将軍」と呼ばれました。承久の乱の時に、御家人たちへ向けて行った演説はよく知られています。

18 銅拍子

金属製の打楽器で、打ち合わせて音を出します。

19 地頭

土地の管理をまかされ、税を集めたり警察のような仕事をする役目。

20 荘園

大きなお寺や神社、貴族などが自分のものにした大きな土地のこと。

21 梶原景時

現在の神奈川県内に住んでいた武士で、鎌倉幕府のなかで強い力をもっていました。話の上手な人物で、義経を討つことになったのも、景時が頼朝へ告げ口をしたことが原因の一つであったと伝えられています。頼朝の死後は幕府から追い出され、一族は滅ぼされてしまいました。

22 藤原秀衡

東北地方の支配者となつて奥州藤原氏の地位を確かなものにした人です。源義経をかくまうなど、源頼朝に反抗しました。

23 藤原泰衡

父秀衡の死後、義経を攻め滅ぼしましたが、のちに頼朝に攻撃されて、奥州藤原氏は滅びました。

24 御家人

鎌倉幕府の将軍と「ご恩」と「奉公」の関係で結ばれた武士のこと。

25 比企氏

比企氏の代表的な人物に比企能員がいます。頼朝の旗あげからずっと頼朝に従っていた人物で、娘が二代將軍頼家の妻となり男の子を産んだので、その祖父として幕府の中で強い力をふるいました。

26 北条時政

源頼朝の妻政子の父で、鎌倉幕府の執権をはじめつとめた人物です。頼朝の死後は有力な御家人を次々に滅ぼし、幕府の政治を実際に動かしました。しかし、三代將軍の実朝を滅ぼそうとして失敗し、引退しました。

27 執権

將軍を助けて、政治を行う役目。

28 北条義時

北条時政の息子で、北条政子の兄弟です。実朝を滅ぼそうとした父時政を引退させ、鎌倉幕府の二代目の執権として強力な力をふるいました。

29 忠節

自分の仕える人にまごころを尽くして仕える気持をかたく守ること。

30 討伐

軍隊を送って、さからうものをうちほろぼすこと。

31 本田近常

現在の埼玉県深谷市の川本地区に住んでいた武士です。重忠が最も信頼する家来のひとり、一の谷の戦いでは平師盛を討ち取って活躍しました。現在の深谷市本田には本田城跡がのこされています。

深谷市内の史跡

はたけやまやかたあと

畠山館跡

畠山重忠が誕生したといわれる館跡です。重忠墓をはじめとする6基の五輪塔、重忠の父重能の墓と伝わる自然石がのこされています。すぐ近くには、重忠の産湯の井戸ものこされています。

現在、畠山重忠公史跡公園として整備されています。また、ひよどり越えの逆落として愛馬を背負って崖を下った重忠の様子を表した銅像が建立されています。



まんぶくじ 満福寺

平安時代につくられ、畠山重忠が寿永年間(1182～1184)に再興したと伝わっています。

「重忠廟」と記された碑や多くの文化財などがのこされています。

うぐいすのせ 鶯ノ瀬

重忠が部下の榛沢成清の館(後榛沢地内)を訪れて帰宅する際、豪雨のため荒川が増水して渡れずに困っていたところ、一羽の鶯があらわれ、鳴いて浅瀬を教えてくださいましたという伝説がのこされる地です。井椋神社を北にぬけたところに、鶯ノ瀬の碑が建てられています。



いぐらじんじゃ

井椋神社

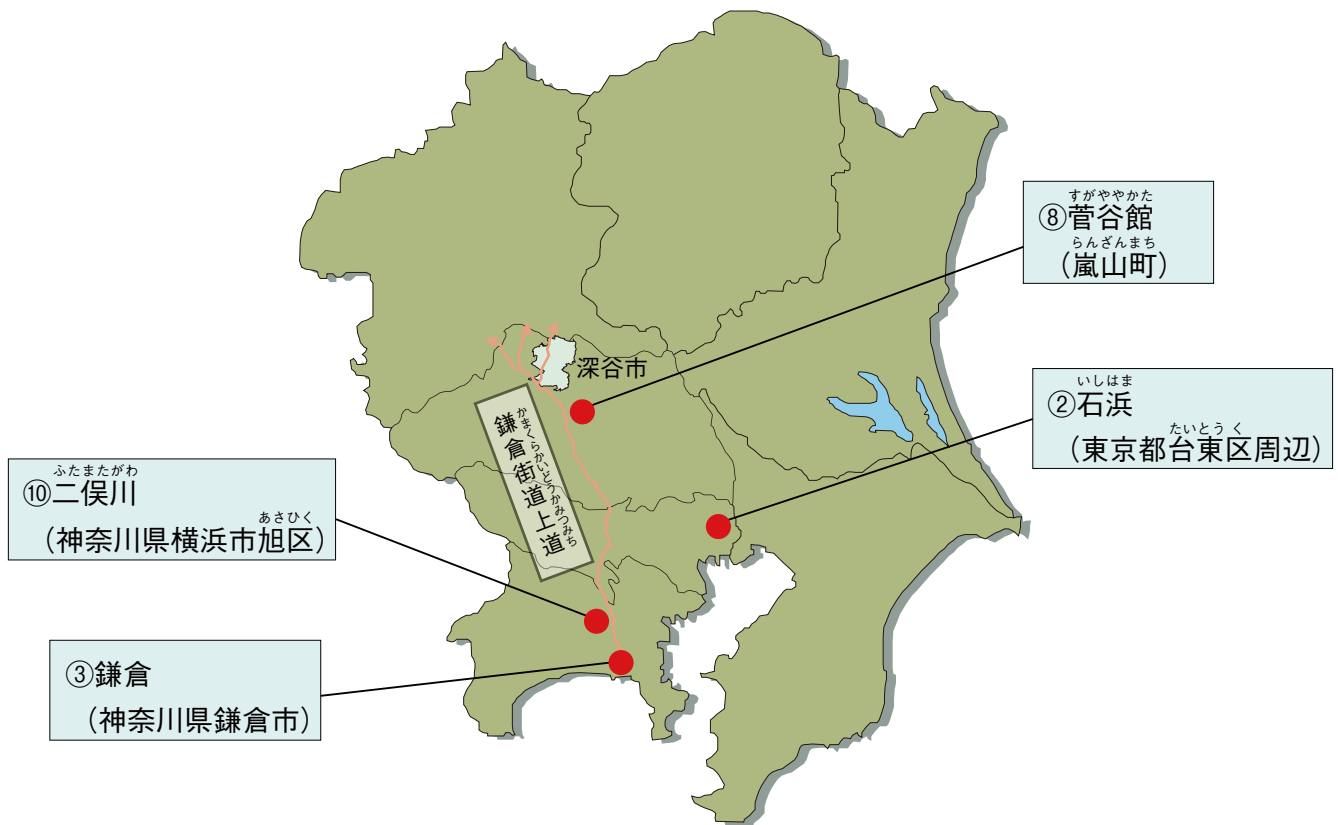
満福寺の北にある神社です。秩父氏の一族である畠山氏が、深谷市畠山の地に進出してきたときに、秩父氏の守り神であった椋神社を移したものと伝えられています。



かまくらかいどうかみつみち 鎌倉街道上道

鎌倉街道上道は武蔵国の北の方から鎌倉へと続く道で、北武蔵の武士たちが鎌倉へ向かう際にも使われたものと考えられています。畠山館跡の西約1kmに鎌倉街道の跡が見つかっており、荒川を渡る「渡し」へと下る坂道の部分と考えられています。

年	西暦	年齢	できごと
長寛二年	一一六四	一歳	重忠、武蔵国の烏山館に生まれる。 父は烏山重能。幼い頃の名は氏王丸。
治承四年	一一八〇	一七歳	以仁王が、全国の武士に兵をあげるよう呼びかけをする。 源頼朝、伊豆で兵をあげる。 ①
寿永二年	一一八三	二十歳	重忠、平氏の味方として秩父一族とともに三浦氏の城を攻め落とす。 頼朝、武蔵国に向かう。 重忠、石浜で頼朝に会い、従う。 ②
二元暦元年	一一八四	二十一歳	頼朝、平氏を倒すため、鎌倉に向かい出発する。重忠、先陣をつとめる。 ③
文治元年	一一八五	二十二歳	平家の都落ち。 宇治川の戦い。木曾義仲の滅亡。 ④
文治二年	一一八六	二十三歳	一の谷の戦い。 屋島の戦い。 ⑤
文治三年	一一八七	二十四歳	平氏、壇ノ浦にて滅亡する。 源義経、京都を追われる。 静御前、鎌倉で白拍子を舞う。重忠、銅拍子を打って伴奏する。 重忠が地頭をつとめる伊勢国の莊園で役人が不正をはたらき、重忠がうつつたえられる。 重忠、囚人となり、所領四か所は没収される。 重忠、許されて武蔵国菅谷館に帰る。 ⑧



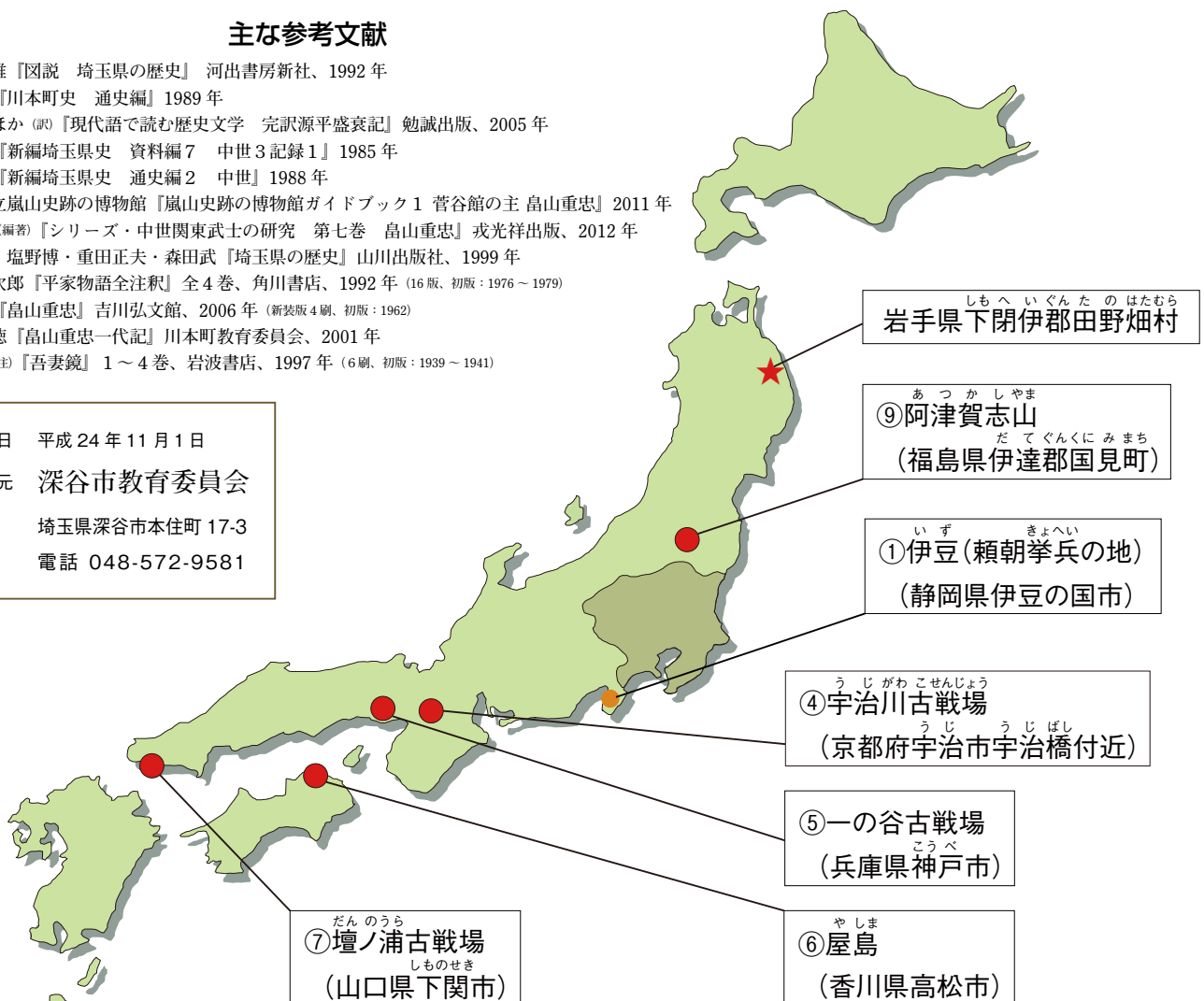
重忠公ゆかりの地 (関東)

元久二年	元久元年	建仁三年	建仁二年	正治元年	建久三年	建久元年	文治五年	文治三年															
一一〇五	一一〇四	一一〇三	一一〇二	一一九九	一一九二	一一九〇	一一八九	一一八七															
四十二歳	四十一歳	四十歳	三十九歳	三十六歳	二十九歳	二十七歳	二十六歳	二十四歳															
北条義時ら鎌倉に帰る。重忠の無実の死を悲しむ。	重保、鎌倉で殺害される。重忠、二俣川で北条氏らの大軍に襲われ、重忠や家来たちが討ち死にする。	重忠、武蔵国菅谷館を出発し、鎌倉に向かう。	頼家、殺害される。	頼家、十七歳で頼朝のあとを継ぐ。	頼朝、死去（五十三歳）。	頼朝、征夷大將軍に任じられる。	重忠、阿津賀志山の戦いで堀を埋めて合戦を有利にする。	義経、東北で自害する。	奥州攻撃開始。重忠、先陣をつとめる。	重忠、鎌倉へ戻る。景時に反逆の計画がないことを誓う文書を書くように言われるが断る。	梶原景時、重忠が頼朝にさからおうとしていと頼朝に告げ口する。	頼朝、征夷大將軍となる。	頼家の親せきの比企一族が討たれる。重忠も討伐軍に参加する。	実朝、征夷大將軍となる。	頼朝、死去（五十三歳）。	頼家、十七歳で頼朝のあとを継ぐ。	頼朝、征夷大將軍に任じられる。	重忠、頼朝が京都へ向かうときに、先陣をつとめる。	重忠、阿津賀志山の戦いで堀を埋めて合戦を有利にする。	義経、東北で自害する。	奥州攻撃開始。重忠、先陣をつとめる。	重忠、鎌倉へ戻る。景時に反逆の計画がないことを誓う文書を書くように言われるが断る。	梶原景時、重忠が頼朝にさからおうとしていと頼朝に告げ口する。

主な参考文献

- 小野文雄『図説 埼玉県の歴史』河出書房新社、1992年
 川本町『川本町史 通史編』1989年
 岸睦子ほか(編)『現代語で読む歴史文学 完訳源平盛衰記』勉誠出版、2005年
 埼玉県『新編埼玉県史 資料編7 中世3記録1』1985年
 埼玉県『新編埼玉県史 通史編2 中世』1988年
 埼玉県立嵐山史跡の博物館『嵐山史跡の博物館ガイドブック1 菅谷館の主 畠山重忠』2011年
 清水亮(編著)『シリーズ・中世関東武士の研究 第七巻 畠山重忠』戎光祥出版、2012年
 田代脩・塩野博・重田正夫・森田武『埼玉県の歴史』山川出版社、1999年
 富倉徳次郎『平家物語全注釈』全4巻、角川書店、1992年(16版、初版：1976～1979)
 貫達人『畠山重忠』吉川弘文館、2006年(新装版4刷、初版：1962)
 福島茂徳『畠山重忠一代記』川本町教育委員会、2001年
 龍肅(訳注)『吾妻鏡』1～4巻、岩波書店、1997年(6刷、初版：1939～1941)

発行日 平成24年11月1日
 発行元 深谷市教育委員会
 埼玉県深谷市本住町17-3
 電話 048-572-9581



重忠公ゆかりの地 (全国)



武蔵武士の鑑

畠山重忠

深谷市教育委員会

